ドヴォルザーク：管楽セレナード

有名な「弦楽セレナード」から 3 年後、1878 年にわずか 2 週間ほどで作曲された。前年末に聴いたウィーン・フィルのメンバーによるモーツァルト《グラン・パルティータ》の名演に触発されたという。「管楽セレナード」というタイトルだが、実際の編成にはチェロやコントラバスの低弦楽器も含まれる。4 楽章構成で、行進曲風の第 1 楽章モデラート・クワジ・マルチアに始まる。なお、この主題は最終楽章の終盤にも回帰するが、これはセレナードを奏でる楽師の入退場の古い名残りとされる。第 2 楽章は民俗色濃厚なメヌエット。ボヘミアのソウセツカー（三拍子のゆるやかな舞曲）やフリアント（三拍子と二拍子が交互に入れ替わる急速な舞曲）が用いられている。美しい叙情を歌う第 3 楽章のアンダンテは、どこか翳りを帯びた夜想曲風。自由なロンド形式の第 4 楽章アレグロ・モルトは、ボヘミアのスコチナー風（二拍子の躍動感あふれる舞曲）のリズムによる快活なフィナーレ。

モーツァルト：13 管楽器のためのセレナード《グラン・パルティータ》

演奏時間が 50 分近くにも及ぶ管楽合奏曲としては異例の長大なセレナード。当時ウィーンで流行していたハルモニームジーク（管楽合奏）のために書かれたが、ハルモニームジークとは、要するにパーティーの際の伴奏音楽（機会音楽）のこと。詳細な作曲年代は定かではないが、初演は 1784 年とされる。いずれにしてもモーツァルトがウィーンに定住してからの作品で、多彩な楽器編成、多楽章構成を採用した、最後の本格的なセレナードである。なお、タイトルの《グラン・パルティータ》は「大組曲」という意味で、これはモーツァルト自身の命名ではないが、本曲の規模内容をよく表わしている。7 楽章からなり、第 1 楽章は序奏付きのソナタ形式による開始楽章。第 2 楽章メヌエットは、クラリネットとバセットホルンの対比の妙が味わえる第 1 トリオに、哀愁を帯びたオーボエの旋律が印象的な第 2 トリオが続く。三部形式の第 3 楽章アダージョは、モーツァルトならではの天上的な美しさにあふれている。第 4 楽章のメヌエットは、陰りを帯びた第 1 トリオとレントラー風の第 2 トリオでコントラストをきかせる。第 5 楽章ロマンツェは、息の長い甘美な旋律。中間部ではファゴットがリズムを刻んで細かい動きをみせる。第 6 楽章はクラリネットが奏する主題と 6 つの変奏。そして第 7 楽章は、陽気で快活なロンドで、フィナーレを飾る。